

La Informilo de NEC

センター通信

第275号

2015年2月10日発行

名古屋エスペラントセンター Nagoja Esperanto-Centro
461-0004名古屋市東区葵一丁目26-10ユニブル新栄301号
郵便振替 00840-8-40765 [名古屋エスペラントセンター]
<http://homepage2.nifty.com/nagoja-esperanto/>



ザメンホフ祭2014センターで

目次

ザメンホフ祭2014	2
NI LEGU!伊藤俊彦	3
「ああ、イタリアの風よ」	5
センター新会員の自己紹介 ・	6
Suga Atsuko kaj Perugialto Toŝihiko	8
お知らせ欄、会費の案内、編集者から	10

ザメンホフ祭2014

<http://homepage2.nifty.com/nagoja-esperanto/>より転載

2014年12月20日（土）、名古屋エスペラントセンター主催のザメンホフ祭が開催されました。【1面に参加者全体写真】

第一部はセンター事務所において午後3時から5時20分、参加者は27人と、近年にない盛況ぶりでした。はじめに、新委員長猪飼吉計より挨拶、センター事務所の移転が10年目にあたり、今後のエスペラント運動への積極的関与を願うとの趣旨が述べられました。

報告は2つあり、第一は、中山欽司さん（豊橋）が、自ら編集された本（三ツ石清『エスペラントは私の大学だ』）によせて、名古屋の先達エスペランチストであった三ツ石さんの業績や人となりを紹介していただきました。第二は藤本日出子さん（恵那）が、今年夏に参加した、バンクーバーでのNASK（北米夏期講習会）の経験について話して下さいました。



続いて、韓国の説話『春香伝』のエスペラント訳（Ĉunhjang）が紙芝居で上演されました。紙芝居のセットは山田義さんが作り上げ、かつ語りも情感をこめてしていただきました。

歌唱練習は『幸せなら手をたたこう』（Se feliĉas ni）を、アコーディオンの伴奏（猪飼吉計）をつけて行いました。この他、本の販売やビンゴゲーム（エスペラントの本が賞品）もありました。

続く第二部は5時半より、場所を近くのルーマニア料理レストラン「サルマーレ」に移し、16人が参加しました。。

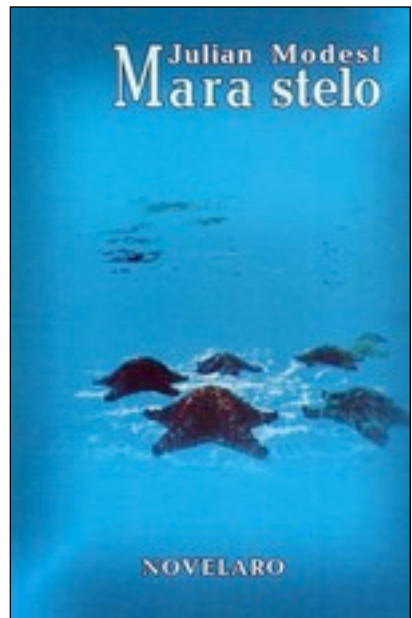


NI LEGU!

読書会では、2014年6月以来、毎月1回、堀泰雄さんの Raportoj el Japanio n-ro 15 を読んできました。本書は、3.11 後の被災地の状況や被災者の声などを生々しく伝えるドキュメントでありルポルタージュです。本書は、エスペラントで時事的な問題をどのように表現するかという点で大いに示唆的でした。また、本書が提起している問題は、現在私たちが直面している課題そのものなので、読書会ではともするとテキストを離れて議論が沸騰することもたびたびでしたが、それをも含めて有益な機会を持つことができました。

昨年12月4日をもって Raportoj を終了し、本年1月29日から、Julian Modest の最新短編小説集である **Mara stelo** を読み始めました。本書は1952年生まれのブルガリアの作家のエスペラントによる著作で、平明達意の文体や静かな作品世界を味わいました。身近なテーマが描かれていて、身につまされたりもしました。参加者は、山田義、前田可一、伊藤俊彦の3名です。

進め方ですが、各自が毎回、予め30ページほどをしっかりと読んできて、当日は、理解できなかった箇所、印象的な、あるいは感銘を受けた表現などを取り上げ、議論し、作品の時代背景などを考えます。それにより、作品の読みを深めることを目標としたいと思います。したがって、テキストを逐語的に訳読することはしません。



そういうわけでスタートを切り、初回には、p4～31までの6編を読み終わりました。次回は La kulpo (p32～35) から Magdaleno (p56～61) までの6編に予め目を通していただき、疑問点や感想などを整理していただくようお願いします。次回は2月26日(木) 午後4時からです。テキストはセンターにあります。ご参加をお待ちしています。



ああ、イタリアの風よ

ああ、風よ、イタリアの風よ。
紺碧の地中海に染まり、
アフロディテの金髪をそよがせ、
さらさらと、さわさわと、
海を渡れ。
マルコ・ポーロの軌跡を辿り、
黄金の国ジバングに至れ。

海の恵み、
そしてああ、海の災い、
怒濤に砕けた浜辺や港、
打ちひしがれた人々に、
イタリアの風よ、勇気を与えよ。

風よ、めぐりめぐりて、
善の循環をなせ。
我らもその風になりて、
世界をめぐらん。

Poezio kaj traduko de Jasuo Hori

Ah, italaj ventoj

Ah, vi, ventoj, italaj ventoj,
tinkturite de la blua maro de la Mediteraneo,
blovetante sur blondajn harojn de Afrodito,
milde, serene, facile,
trapasu la maron.
Sekvu la spuron de Marko Polo
kaj venu al la ora lando Japanio.

Beno de maro,
sed ankaŭ malbeno de maro.
Al vilaĝoj kaj havenoj frakasitaj de la ondegoj,
Al homoj perdintaj esperon,
Vi donu kuraĝon.

Vi, ventoj,
ciklu en la mondo
kaj cikligu bonon.
Ankaŭ ni apartenos al vi, ventoj
kaj ciklos en la mondo.

「ああ、イタリアの風よ」

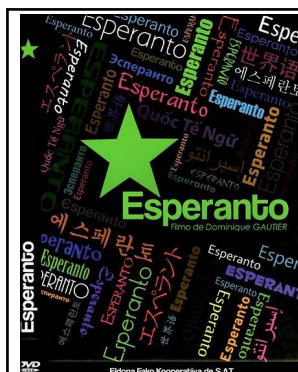
伊藤俊彦

イタリアの都市ペルージャに在住している画家の倉石千種さんと書家の伊藤順子さんとは、絵と書のコラボ作品を制作し、たびたび二人展を開催しています。また、作品の売上の一部を東日本大震災の被災者支援のために寄付しています。

堀泰雄さんは、彼女たちのこうした活動に共感して、「ああ、イタリアの風よ」と題する詩を寄せてくれました。その詩が写真のとおり、堀さんの新著『世界の旅人堀さんのエスペラント気ままエッセー4』（ホリゾン出版、2014年）に掲載されています。

また、千種さんと順子さんのホームページ〔Gallery Chigusa & Junko〕にはこの詩の原詩、エスペラント訳を含め14の言語による訳詩が掲載されています。さらに、二人がこれまでに発表した作品、二人展やワークショップなどの多彩な活動の報告、二人の経歴も掲載されていますので、ぜひごらんください。

DVD紹介



エスペラント（以下 E と略称）を扱った DVD を見ました。タイトルは Esperanto。E の歴史や文法、世界大会やグレジヨンでのセミナーの光景、パスポルタ・セルヴォなど盛りだくさんに紹介する DVD です。世界各国の都市の街並の風景をはさみつつ、エスペランチストたちが思うところを次々に E あるいはフランス語で語ります。日本語を始め、22の言語による字幕がついています。

全体としてはヨーロッパ中心という印象ながら、韓国人、中国人、ハイチ人、キューバ人なども登場します。E 界の有名人では、ウルリッヒ・リンス、プロバル・ダシュグプトなど。堀泰雄さんも登場して、日本で平和運動のため E がいかに活用されているかを語ったり、エスペランチストたちの前で尺八を吹いたりしています。算盤を教えるマルカリアン君枝さんの姿も。

ザメンホフのユートピアを受け継ぎ、世界をより良くするために E を使うのだと力説する人あり、ヒップホップグループの若者あり、世界が多様なように、E に対する関心、活用の仕方も多様です。印象に残ったのは大会や集会などで歌うシーンが多いこと。E と音楽とが相まって人を結びつけるのでしょうか。アメリカ帝国主義をラテンアメリカの立場から批判するため、パブロ・ネルーダの詩に曲をつけた作品をハバナの世界大会で歌うのだ、と語る若者も登場します。

プロの監督 (Dominique GAUTIER) に依頼して制作。2013年に SAT から刊行。収録時間は1時間ほどです。

センター新会員・清水美穂さんの自己紹介

Mi ĝojas vin vidi.

年が明けて2015年になりました。新しい年が皆様にとって希望に満ちた日々につながりますよう、心からお祈り申し上げます。さて、年の暮れのザメンホフ祭ではたくさんの大先輩にお目にかかることができ、本当に嬉しく思いました。それぞれの方が自分にあった方法で、無理なくエスペラント語と付き合っておられるのを知りました。わたしも遅ればせながら、できることから始めていきたいと思っています。どうぞよろしくご指導くださいませ。

簡単に自己紹介をさせていただきます。わたしは1955年、名古屋市西区の浄心で生まれ、現在は、岐阜県関市迫間（はざま）で飲食店を営んでいます。エスペラント語との最初の出会いは、小学生の頃に読んだ本、『偉人の話』のザメンホフについての記述でした。（今も、学年別になったこのタイトルの本はありますが、いつのまにかザメンホフの章はなくなっているようです）ナイチンゲールのクリミア戦争時代の活躍とともに、平和を目指す人工的な国際語の話に心躍らせたものでした。

学生時代に東欧の歴史に興味を持ち、卒論でボスニア・ヘルツェゴヴィナの19世紀社会史をテーマに選びました。大学卒業後、まだチトー大統領が健在だったユーゴスラヴィアに留学し、ザグレブとサラエヴォで数年間を過ごしました。バルカン是多民族、多宗教、多言語と複雑な文化背景を持つ興味深い地域です。その縮図のような街、サラエヴォで青春時代をすごしたことは、わたしにとって意味深い体験となりました。

残念ながら、チトーの死後この国は少しずつ経済状態が悪化し、社会問題はいつしか民族問題に巧みに摩り替えられ、ついには1990年代の紛争にいたりしました。親しかった友人からの悲痛な便りを受け取るたびに、現地から遠く離れて暮らす自分に、いったい何ができるのかと問いかける日々が続きました。報道番組やドキュメンタリーなどの解説や翻訳のお手伝いをしながら、いつかもう一度バルカンに行き、その状況や変化を自分自身の目で確かめたいという思いが大きくなりました。

紛争終結後数年たって、旧ユーゴスラヴィアの各地を定期的に訪れ、さまざまなプロジェクトに参加するようになりました。そのうちのひとつ、2004年に北ボスニアの都市バニャルカではじめた日本学講座は、多くの市民の協力と参加で今も続いています。昨年はこの街でユニークな日本語教科書の出版を手伝いました。2014年～2015年現在、この教科書を使ってギムナジウムの課外授業で高校生が日本語を勉強しています。

実は、2月にバルカン訪問を計画しており、まずはこの授業風景を見学に行ってきます。若い人たちが遠い国の文化を学ぶことで、「世界は広く、異文化が共存することは素敵なことだ」ということを実感してほしいと思っています。ボスニア和平が結ばれて

今年で20年目を迎えます。世界のまなざしが他の紛争地域に移り、表面上は街や村に平和がもどってきたように見えても、悲劇を招いた原因すべてが解決されたわけではありません。戦後の苦しい生活を強いられている人々が、たやすく仮想の敵を別の民族や別の宗教に見出していく構図は今もそれほど変わってはいないのです。

残念なことに1990年代前半にこの地域で吹き荒れた嵐のような悲劇は、現在も形を変えて街や自然の中に姿を潜めています。文字通りその大半が地中に残る地雷もさることながら、人びとの心の奥底に留まったままの精神的な傷は、はるかに深刻です。大量虐殺、強制収容所での集団レイプといった民族浄化がつい最近の記憶として生き続ける国です。戦争を口実になされた非人間的な行為のもたらした結果として、当時祝福されずに生まれた子どもたちが、今ちょうど青年期を迎えています。

しかし、どんなに重い過去を引きずっていても、わたしがこの10年間付き合ってきた若い人たちは、皆素晴らしい可能性を秘めた青年たちです。彼らがより大きく羽ばたく希望と機会を見つけるための応援ができたならと願っています。ご存知の方も多いと思いますが、現在のボスニアには、イスラームの人びとの多い地域、カトリックやオルトドックスの地域、そのほかユダヤ教徒、ジプシーなどが渾然一体となった地域があります。思えばザメンホフの生まれたビヤトリストクも、多文化が共生する地域でした。

一昨年クロアチアの友人を介して、エスペランティスト、スポメンカ・シュティメツと知り合いました。彼女は“Tena…Hejmo en Mezeŭropo” 1996（邦訳『クロアチア物語』）や“Hodler en Mostar” 2006などを書いた作家です。彼女とさまざまな話をするうちに、どうしても彼女のホドラーの本を読んでみたいと思うようになりました。その生涯をほとんどスイスで過ごしたはずのこの画家が、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの橋の街、モスタルでいったい何をしていたのか・・・実は画家本人がモスタルに赴いたわけではなく、彼の自画像をはじめとする数枚の絵画が、数奇な運命に翻弄され、ボスニアにやってきたというお話なのです。現在、K. K. さんが日本語訳を進めており、わたしも少しだけお手伝いすることになりました。物語の中に出てくるお料理や食材について、解説や注を入れる程度のささやかな協力です。それでも、辞書が引ける程度にエスペラント語に慣れ親しんでいれば、こうした作業もぐんと楽しくなります。

このような事情で、わたしは昨年夏の終わりに名古屋エスペラントセンターのメンバーに加えていただきました。60歳になって新しい言語を勉強するのは、なかなか大変ですが、あせらずにゆっくり奥深いエスペラントの世界を楽しんでいきたいと思っています。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

2015年1月 迫間にて 清水美穂

Suga Atsuko kaj Perugia

Ito Tošihiko

En Perugia, la urbo en Italio, troviĝas unu unika ŝtata universitato, kiu nomiĝas Universitato por fremduloj de Perugia (Università per Stranieri di Perugia), kiu estis fondita en 1925, en la faŝisma periodo, por disvastigi la italan lingvon kaj kulturon al la tuta mondo. En tiu ĉi universitato mi studis la italan lingvon kune kun mia edzino kaj multaj fremdlandaj gejunuloj dum unu kaj duonjaroj.

Kaj studis tie ankaŭ Suga Atsuko (1929–1998), unu el la miaj plej ŝatataj japanaj verkistoj. Jes, ŝi estas mia antaŭulino de tiu universitato. Ŝi studis tie nur tri monatojn en la somera kurso de la jaro 1954. De tiam jam pasis 60 jaroj. Ĉar ŝi povis lerte manipuli la anglan kaj la francan lingvojn kaj ŝia germana amikino instruis la fundamenton de la itala lingvo, ŝi tuj elektis la mezgradan kurson de la itala lingvo kaj subite ellernis ĝin.

Mi ne scias, ĉu ŝia vivo en Perugia estis por ŝi, nur unu epizodo aŭ ne la estonta verkistino. Sed al mi ŝajnas, ke ĝi donis la bazon al ŝia longa vivado en Italio kaj ŝia verkado.

En 1958 ŝi ekloĝis en Romo por studi la teologion en la pontifika instituto Regina Mundi kaj en 1960 translokiĝis al Milano, kie ŝi eklaboris en la librejo Corsia dei Servi kaj renkontis unu italon, kiu nomiĝis Giuseppe Ricca (alinome Peppino), laboris en tiu librejo kaj estis poeto. La sekvantan jaron Atsuko kaj Peppino geedziĝis, sed post nur 6 jaroj li mortis pro subita malsano.

Depost lia morto, ŝi restadis en Italio ankoraŭ kvar jarojn kaj tradukis japanajn novelojn en la italan lingvon, kiel ekzemple, tiujn de Tanizaki Ĵun'ičirou, Kaŭabata Jasunari ktp. Ŝi havis multajn italajn geamikojn kaj gekonsilantojn. Sed en 1971 finfine ŝi revenis al Japanio kaj instruis la italan lingvon kaj literaturon en kelkaj universitatoj. Kiam aperis ŝia unua verko “Milano, la pejzaĝo en nebulo”, ŝi jam estis 61-jara. Kaj aperis unu post alia kelkaj verkoj, en kiuj ŝi rememoris sian vivon, sian edzon kaj siajn geamikojn en Italio kaj diskutis la italan literaturon ktp. En 1998 ŝi mortis.



結婚式直後の須賀敦子とペッピノ
Suga Atsuko kaj Peppino

La morto de sia edzo kaj la soleco devis doni grandan tristecon kaj doloron al ŝi, sed samtempe maturigis ŝin homo kaj verkistino. Sed tamen tiu ĉi estas alia historio. Kiam ŝi loĝis en Perugia, ŝi estis ankoraŭ juna, esperoplena kaj ĝuis la vivon kaj tute ne antaŭsentis pri sia estonteco .

Antaŭ kvin kaj duonjaroj mi perdis la vojon en la vivo kaj la esperon kaj finfine decidis studi la italan lingvon en la sama universitato, kie Atsuko studis ĝin antaŭ 60 jaroj, kiel jam menciite. En Perugia, tiu ĉi bela kaj antikva urbo, mi ofte rememoris ŝin. Iun tagon mi vagadis kun mia edzino en la urbo, serĉante la domon de la familio Campana, kie ŝi loĝis dum tri monatoj kaj finfine povis trovi ĝin. En la tereno de la universitato estas unu konstruaĵo nomata Palaceto Prosciuti (Palazzino Prosciuti), kiu estis nomita laŭ Ottavio Prosciuti, fama profesoro kaj rektoro (1980–1982), kies lecionon pri la itala literaturo aŭskultis Atsuko kun granda intereso.

Kaj, proksime al Perugia, situas la fama urbo Assisi, kie naskiĝis kaj agadis Sankta Francisko de Assisi (1181/82–1226). Atsuko tre amis kaj ofte vizitis tiun ĉi belan, trankvilan kaj malgrandan urbon. Ankaŭ por ni, tiu ĉi urbo estas la sankta loko kaj vizitis ĝin pli ol dek fojojn.

Jam de longe mi interesiĝis pri la kulturo kaj la historio de Italio kaj vizitis ĝin dekkvar fojojn. Sed la loĝado en Perugia ebligis al mi pli intiman komprenon de la itala kulturo, historio, homoj kaj precipe la verkoj de Suga Atsuko, kiuj profunde enradikiĝas en Italio.



ペルージャ外国人大学 Universitato por fremduloj de Perugia



日時：2015年6月20日（土）～21日（日）

会場：kokoka 京都市国際交流会館

主催：京都エスペラント会、一般社団法人関西エスペラント連盟

大会テーマ：国境のないことば・エスペラントで世界に友を！

Amikojn en la tuta mondo per Esperanto, lingvo sen landlimoj !



名古屋エスペラントセンター（略称：センター、NEC）は、国際共通語エスペラントの活用をつうじて21世紀の情報社会を展望し、ホームページによる情報を発信しています。行事の報告や本の入荷状況なども写真なども使って投稿されています。

会員種別（月会費） 『センターは皆様の会費で維持されています』

A会員：500円、B会員：1000円、C会員：2000円、D会員：3000円

＊種別による会員権に区別はありません。

＊払込済年月と種別は『センター通信』発送時の宛名の下に記載しています。

＊払込会費の月数、種別変更、寄付などはその旨記載し振込をお願いします。

＊郵便振替 00840-8-40765 [名古屋エスペラントセンター]

編集者から

毎年5月の予定の「東海エスペラント大会」の開催地や日程は未定です、ここで発表できないのが残念です。

名古屋エスペラントセンターの今年の総会は3月に開かれます、日程など決まりましたらホームページなどでお知らせします。

「センター通信」の次回は総会が終わってからになります。写真や記事の投稿をお待ちします。yamadapiano@mac.com まで。